



Title	憲政危機と勝利の陥穂 : 1910年1月総選挙と12月総選挙
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪大学英米研究. 2012, 36, p. 55-94
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99357
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

憲政危機と勝利の陥穂 —1910年1月総選挙と12月総選挙—

岡田 新

1 はじめに

1910年は、自由党と統一党（Unionists）の政治決戦の年であった。1月と12月に、わずか11ヶ月をはさんで二度総選挙が行われた。首相アスキス（H.H.Asquith）、蔵相ロイド・ジョージ（Lloyd George）率いる自由党が提起した「人民予算」（People's Budget）の是非と貴族院の拒否権の問題が、国民の審判に委ねられた。1月総選挙で自由党は、1906年総選挙の大勝利から大きく後退、少数派政権を構成することを余儀なくされた。だが労働党とアイルランド国民党の議席をあわせれば、統一党を圧倒した。さらに12月総選挙でも、自由党は1月総選挙の勢力をほぼ維持するのに成功した。「貴族か人民か」が問われた決戦で、統一党は自由党を政権から蹴落とすことに失敗したのである。⁽¹⁾

もっとも選挙結果に示された国民の審判にもかかわらず、貴族院に依拠する統一党は、貴族院の拒否権を維持するため最後まで抵抗を続けた。頑強な抵抗に直面したアスキス首相は、貴族院が拒否権に固執し続ければ、国王大権によつて自由党系貴族を大量に創出し貴族院の抵抗を覆す、という国王ジョージ5世の約束を公にした。この恫喝を受けてようやく貴族院の抵抗の一角が崩れ、翌年8月、貴族院の拒否権を制限する議会法（Parliament Act）が貴族院を通過する。

貴族院の拒否権が封印されたことで、イギリスの政治的な構図は大きく変

貌した。統一党は、もともとアイルランド自治を阻止するために結ばれた保守党と自由統一党の統一戦線であった。だが貴族院の拒否権が封じ込められたことで、グラッドストーン（W.H.Gladstone）以来自由党が推進してきたアイルランド自治法の成立を阻む制度上の壁は消滅した。庶民院の多数を握る自由党政権の手でアイルランド自治が成立するのは、もはや時間の問題となった。それでもなお統一党と北アイルランド、アルスター地方（Ulster）のプロテスタントは、アイルランド自治をあくまでも阻止するため、非法の武装集団を組織して抵抗する。むき出しの暴力を誇示した抵抗は、第一次大戦の勃発直前まで続き、アイルランドは内乱の瀬戸際に追いやられた。

しかし少なくとも選挙の上では、1910年の2度の総選挙は、貴族院の拒否権の問題に決着をつけた。この貴族院に対する庶民院の勝利は、名譽革命における王権に対する議会の勝利、19世紀の選挙法改正に体現された中産階級、労働者階級への選挙権の拡大とならぶ憲法上の根本的変革であった。20世紀初頭の2度の総選挙によって、ようやくイギリスは、選挙に示された国民の意志が貫かれる政治体制を創り上げたのである。その後イギリスは、アイルランドを中心とした激しい政治的動揺と暴力の嵐に襲われる。それは貴族院という重い蓋が外され、アイルランド自治というパンドルの箱が開けられた避けがたい帰結であった。

にもかかわらず、選挙研究の上では、1910年の1月総選挙と12月総選挙は、必ずしも突っ込んだ比較の対象とされてこなかった。というのも全体的な議席数の上では、2度の選挙の結果にほとんど変化がみられなかったからである。統一党の議席は、イギリス全体で273議席から272議席へわずか1議席減ったに過ぎなかった。自由党は275議席から272議席に3議席減少し、アイルランド国民党は82議席から84議席に、労働党は40議席から42議席に増えただけであった。全体的な議席という点から見れば、12月総選挙は1月総選挙の結果をほぼ裏書したに過ぎなかった。

しかし選挙がもたらした直接の政治的な結果を離れて、選挙における政党間の対抗関係や政党の選挙基盤を探る分析的な視点から見ると、1910年1

月総選挙と 12 月総選挙は興味深い比較の対象となる。二つの総選挙は、全く同じ有権者名簿を前提に闘われた。一方 12 月総選挙では、労働党からの立候補者が絞りこまれ、かなりの選挙区で政党の対決の様相が変化した。

別稿で指摘したように、1906 年総選挙以後の補欠選挙で自由党の得票は大きく落ち込んだ。1910 年 1 月総選挙の直前でも自由党は以前の党勢を回復できず、1 月総選挙においても党勢の回復は限定的であった。⁽²⁾ では「人民予算」と貴族院の拒否権を主題にした政治決戦の年、1 月総選挙から 12 月総選挙の間に、自由党は党勢を盛り返すことに成功したのであろうか。

また繰り返し指摘してきたように、1906 年総選挙以後、統一党を共通の敵として候補を絞り込んだ場合、労働党と自由党の支持者は、結束して共通の敵を打ち倒してきた。ただし候補が統一されない場合、自由党と労働党の候補が共倒れになる例も少なくなかった。共通の敵を倒すために両党の支持者は協調したが、両者の間には亀裂も広がりつつあった。では両党やその支持者の関係は 1910 年の政治決戦の中で、どのように変化したのであろうか。

同じ有権者名簿で闘われた 1910 年の 2 度の総選挙の結果を、こうした観点から比較検討することは、この時期の各党の勢力、その協調と対立の様相を掘り下げるための重要な資料を提供するであろう。本稿では、特に議席の変動の背後にある政党間の対抗関係による各党の得票の変化に着目し、1910 年の 2 度の総選挙の結果に検討を加えてみたいと思う。

2 1 人区の対決の構図

まずイングランド、ウェールズ、スコットランドの 517 の 1 人区について、2 つの総選挙における各党の立候補者と当選者を見てみよう。⁽³⁾

表 1 および表 2 から分かるように、総選挙の間がわずかに 11 か月しかなかったため、12 月総選挙では 1 月総選挙に比べて、立候補者は 3 分の 2 に激減し、500 人以上減少した。その結果、12 月総選挙では無投票選挙区が、1 月総選挙時の 6 選挙区から一挙に 91 選挙区にまで大幅に増加した。1 月

総選挙で落選した候補のおよそ半分が、短い準備期間で巻き返すことが難しいと判断し、立候補を取りやめたと考えられる。ただし 1900 年総選挙では、無投票当選のほとんどが保守勢力の議席だった。これに対して 1910 年 12 月の総選挙では、無投票当選は、統一党だけではなく、自由党も相応の比重を占めている。さらに労働党にも無投票当選者が現れた。保守勢力だけが無投票で勝利を手にするかつての状況はもはやみられない。10 年で無投票選挙区の様相は一変したといってよい。

表 2 から分かるように、統一党と自由党の一騎打ち選挙区は、12 月総選挙では 1 月総選挙に比べて 359 から 332 へと 1 割近く減少した。だがそれでも統一党と自由党の一騎打ち選挙区は、1 人区全体の 64% を占め、選挙戦の中心であった。一騎打ち選挙区での勝敗は、1 月総選挙では統一党がわずかに優勢、12 月総選挙では自由党がわずかに優勢であった。

一方、統一党と労働党の一騎打ちの選挙区も 35 から 28 へと減少した。だがこのカテゴリーでは、いずれの選挙でも労働党が優勢であった。さらに三つ巴の選挙区も、20 から 7 に大きく減少した。自由党ないし労働党が、候補者を絞り込んだ結果である。加えて、12 月総選挙では、自由党と労働党が直接対決する選挙区すら登場していたことが注目される。

こうした政党の対決の構図の変化を明らかにするため、2 つの総選挙で政党の対決の構図がどのような変化したかを分類してみることにしよう。

表 1 1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙 1 人区における各党の立候補者と当選者数

	統一党	自由党	労働党	その他	計
1910 年 1 月	511(233)	470(252)	64(30)	100(2)	1445(517)
1910 年 12 月	422(236)	397(248)	43(31)	57(2)	919(517)

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は立候補者数、括弧内の数字は当選者数を示す。

表2 1910年月総選挙と12月総選挙の1人区における政党の対決と獲得議席

政党の対決の構図		統一党 ・自由党	統一党・ 労働党	自由党・ 労働党	三つ巴	その他	無投票	計	
1910年 1月	選挙区		359	35		20	97	6	517
	当選者	統一党	187	7		4	30	5	233
		自由党	172			16	63	1	252
		労働党		28			2		30
		その他					2		2
1910年 12月	選挙区		332	28	3	7	56	91	517
	当選者	統一党	153	4		2	23	54	236
		自由党	179		1	5	29	34	248
		労働党		24	2		2	3	31
		その他					2		2

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は該当する選挙区数を示す。

表3 から分かるように1月選挙、12月選挙とも政党の対決の構図が変わらなかった選挙区は、無投票の4選挙区、その他の37選挙区を別とすれば、統一党対自由党の一騎打ちの275選挙区、統一党対労働党の一騎打ち26選挙区、三つ巴戦の4選挙区であった。政党の対決の構図が変わらなかったこうした選挙区での各政党の得票の変化は、2つの総選挙における各党の党勢を直接に表現していると考えられる。

他方12月総選挙で、いずれかの政党が候補を取り下げて政党の対決の在り方が変化した選挙区は、三つ巴戦から統一党と自由党の一騎打ちとなった11選挙区、三つ巴戦から統一党・労働党の対決区となった1選挙区、さらに三つ巴戦から自由党・労働党の対決となった1選挙区、そして三つ巴戦か

憲政危機と勝利の陥落

ら無投票になった 1 選挙区であった。こうした選挙区における得票の変化は、各政党の協調と対立の様相を分析する資料となる。また統一党と労働党の対決から統一党と自由党の対決になった選挙区が 4 選挙区、統一党と自由党の対決が統一党と労働党の対決にかわった選挙区も 1 選挙区あった。これらの選挙区も、政党の対決と協力の実像を探る貴重なケースを提供する。⁽⁴⁾

さらに統一党と自由党の対決に労働党が新たに立候補して三つ巴戦になった選挙区が 2 選挙区、統一党と労働党の対決に自由党が新たに参戦した選挙区が 1 選挙区あった。これらの選挙区は自由党と労働党の連携が破れた場合、選挙結果にどのような影響があったかを示す資料となるであろう。

以下それぞれのカテゴリーに即して、各政党の得票の変化を立ち入って検討してゆくこととしたい。⁽⁵⁾

表3 1910年1月総選挙と12月総選挙の1人区における政党の対決の構図

		1910年1月総選挙				
		統一党 ・自由党	統一党・ 労働党	三つ巴	その他	無投票
年 1 月 総 選 挙	統一党・自由党	275	4	11	42	
	統一党・労働党		26	1	1	
	自由党・労働党	1	1	1		
	三つ巴	2	1	4		
	その他	15		2	37	2
	無投票	66	3	1	17	4

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は該当する選挙区数を示す。

3 自由党の苦境

(1) 自由党・統一党の一騎打ち選挙区

1910年1月選挙と12月選挙の双方で、統一党と自由党の一騎打ちが続いた選挙区は、275選挙区あった。これらの選挙区は1人区の半数以上を占め、戦いの主戦場であった。表4から分かるように、この主戦場で統一党と自由党は、数パーセントの差で厳しいしばぜり合いを繰り広げていた。

表4、表5と図1、図2は、1910年1月総選挙と1910年12月総選挙における自由党の得票率の分布を示したものである。尖りを計算すると、それぞれ1.58、1.73となり、正規分布からかなりはずれた中央に寄った分布を示している。いずれの選挙でも、自由党の得票率50～55%だった選挙区が最も多く、次いで55～60%のレンジの選挙区が多い。50～55%の選挙区は、1910年1月総選挙では84選挙区を数え、このカテゴリーに属する275選挙区の30.5%を占めていた。12月総選挙では50～55%の選挙区が80選挙区、29%を占めていた。表には掲出していないが、50～51%という大激戦を演じた選挙区も、1910年1月総選挙では7選挙区、12月総選挙で3選挙区あった。

獲得議席についてみると、このカテゴリーでは1月総選挙では統一党がわずかに優勢で、12月総選挙では自由党がわずかに優勢であった。しかしこれをみると逆に、1月総選挙では、自由党は50.06%と50%をわずかに上回る得票率を獲得している。1月総選挙では自由党は、統一党との正面対決でまだわずかに競り勝っていたと言えよう。ところが、12月総選挙では、自由党の得票率は49.64%に低下し、わずかながら50%を割り込んでいる。得票率の差はごくわずかで、これを趨勢をあらわす標本として考えれば、誤差の範囲に入り、ここから全体的の趨勢を推定することは適切とはいえない。だが選挙の場合には、一票の差が勝敗を分ける。このことを考えると、全体の選挙区の半数を占めるこうした選挙区で、12月総選挙で自由党の得票率

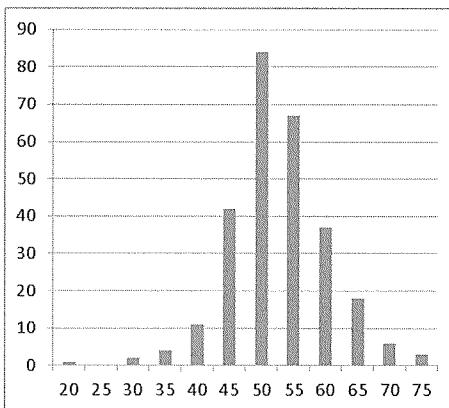
が、重大な分水嶺である 50%を割りこみ、統一党に競り負けたという事実は、重要な意味を持っている。1906 年で大勝利を収めた自由党は、選挙戦の主戦場である統一党との一騎打ち選挙区で後退を続けていたが、1910 年 12 月の時点での得票率では、ついに逆転されたのであった。

表 6 図 3 は、1 月総選挙と 12 月総選挙の自由党の得票率の増減の分布を示したものであるが、これをみると、自由党の得票率は平均 0.4% 減少したが、得票率の増減の分布をみると、プラス 0 ~ 1% の選挙区が最も多いものの、全体としてはマイナスの方向に歪んで裾を引いた分布となっており、プラスの側は 2% より右側が切り落とされたような形になっている。自由党の得票率の減少は、平均値ではわずかであったものの、12 月総選挙における自由党の得票率は明らかに頭打ちになり、下降基調に転換しつつあった様相が読み取れる。

表 4 1910年1月と12月の総選挙で自由党・統一党の一騎打ちだった1人区における
1910年1月総選挙での自由党得票率の分布

得票率 (%)	選挙区数
0~20	1
20~25	0
25~30	2
35~40	4
40~45	11
45~50	42
50~55	84
55~60	67
60~65	37
65~70	18
70~75	6
75~80	3
合計	275
平均得票率	50.05
標準偏差	7.62
歪み	-0.08
尖り	1.58

図 1



注記

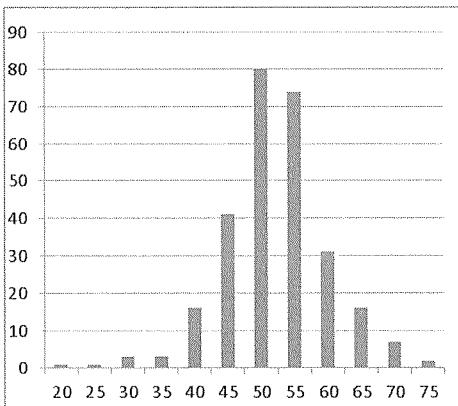
1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は該当する選挙区数を示す。

憲政危機と勝利の陥穽

表5 1910年1月と12月の総選挙で自由党・統一党の一騎打ちだった1人区における
1910年12月総選挙での自由党得票率の分布

得票率 (%)	選挙区数
0~20	1
20~25	1
25~30	3
35~40	3
40~45	16
45~50	41
50~55	80
55~60	74
60~65	31
65~70	16
70~75	7
75~80	2
合計	275
平均得票率	49.64
標準偏差	7.82
歪み	-0.30
尖り	1.73

図2



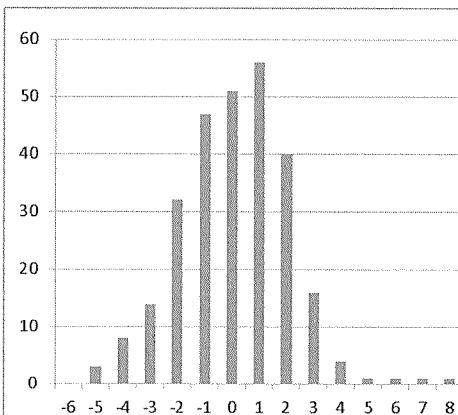
注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は該当する選挙区数を示す

表 6 1910 年 1 月と 12 月の総選挙で自由党・統一党の一騎打ちだった 1 人区における
1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙における自由党得票率の増減

得票率 (%)	選挙区数
-6~-5	3
-5~-4	8
-4~-3	14
-3~-2	32
-2~-1	47
-1~0	51
0~1	56
1~2	40
2~3	16
3~4	4
4~5	1
5~6	1
合計	275
平均得票率	-0.41
標準偏差	2.00
歪み	0.17
尖り	0.98

図 3



注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は該当する選挙区数を示す

こうした自由党の党勢の消長には、地域差があった。表 8 はヘンリー・ペリング (Henry Pelling) の地域分類を踏襲して、イギリス本土を 15 の地域に分け、このカテゴリーに属する 1 人区の得票率を、地域毎に平均したものである。⁽⁶⁾ これらの選挙区は無差別に選ばれているわけではなく、各地域を代表する標本とみなすことはできない。だがこのカテゴリーに属する 1 人区について限って言えば、繊維産業の中心地で労働者の有権者が多いラ

ンカストリアで、1月総選挙では自由党の得票率は50%を超していたのに、12月総選挙では1.82%得票率を下げ50%を割り込んだことは、自由党にとって痛手であった。自由党は、デヴォン・コーンウォールのような農村地域でも得票率を下げているが、ランカストリアの他、イングランド北部、ピーカー・ドン地域など工業地帯で軒並み得票率を下げていることは、示唆的である。

(2) 労働党と統一党の一騎打ち

一方労働党も、統一党と労働党の一騎打ち1人区では決して芳しい結果を残していない。表6から分かるように、統一党と労働党の一騎打ちが続いた26選挙区で、労働党は平均すると-1.8%も得票率を減らした。得票率の減少幅でみれば、労働党は自由党よりさらに戦績が悪い。事実ウールリッジ(Woolwich)で労働党は議席を奪い取ったが、ヴィガン(Wigan)とセントヘレンズ(St.Helens)では議席を失った。⁽⁷⁾

しかし統一党と労働党との一騎打ち選挙区における労働党のリードは、もともと全般的にみて統一党と自由党との一騎打ち選挙区における自由党のリードより、はるかに大きかった。このため得票率でみると、得票率の減少にもかかわらず、12月総選挙でも労働党はこのカテゴリーでなお全体として統一党に大きな優位を保っている。労働党は自由党より得票率を落としたものの、平均すればなお14.3%もの得票率のリードを統一党に対して維持していた。一騎打ち選挙区で50%を割り込んだ自由党のように、労働党は土俵際へ追い詰められていたわけではなかったことが分かる。

表7 2010年1月総選挙と2010年12月総選挙で、自由党と統一党の一騎打ちであった1人区における地域別の自由党得票率(%)

地域	選挙区数	2010.01	2010.12	増減
BRISTOL	15	50.28	50.49	0.21
CENTRAL	13	45.33	46.03	0.70
DEVON & CORNWALL	5	46.72	44.62	-2.10
EAST ANGLIA	16	50.65	51.57	0.92
EAST MIDLAND	22	52.09	51.88	-0.21
LANCASTRIA	31	50.92	49.10	-1.82
LONDON	43	46.62	46.19	-0.43
NORTH ENGLAND	11	55.41	54.15	-1.26
PEAK-DON	5	55.61	54.28	-1.33
SCOTLAND	28	55.96	55.10	-0.86
SOUTH-EAST	31	43.05	43.61	0.56
WALES	14	58.72	57.89	-0.82
WESSEX	7	47.11	46.94	-0.17
WEST MIDLAND	16	45.81	46.11	0.30
YORKSHIRE	18	54.01	53.26	-0.76
合計/平均	275	50.05	49.64	-0.47

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 一番左の列は該当する選挙区数を、中央の2列は1910年1月、12月の総選挙における自由党の得票率を示し、一番右の列は自由党の得票率の増減を示す。
3. 地域の分類は、Henry Pelling, *Social Geography of British General Elections 1885-1910* (Macmillan, 1967) に従う。

憲政危機と勝利の陥落

表8 1910年1月総選挙と12月総選挙とともに統一党と労働党の一騎打ちであった1人区における各党の得票率(%)

選挙区	統一党		労働党		労働党の増減
	1910.01	1910.12	1910.01	1910.12	
Deptford	48	48.6	52	51.4	-0.6
Woolwich	50.9	49.3	49.1	50.7	1.6
Barrow-in-Furness	44.8	47.1	55.2	52.9	-2.3
Bradford, West	33.4	36	66.7	64	-2.7
Hanley	36.1	35.8	63.9	64.2	0.3
Leeds, east	30	32	70	68	-2
Liverpool, Kirkdale	51.4	58.4	48.6	41.6	-7
Manchester, East	45.5	45.7	54.5	54.3	-0.2
Manchester, North-East	41.6	48.8	58.4	51.2	-7.2
St.Helens	46.7	51.1	53.3	48.9	-4.4
Sheffield, Attercliff	43.9	45	56.1	55	-1.1
West Ham, South	36.9	33.6	63.1	66.4	3.3
Wigan	47.2	53.2	52.8	46.8	-6
Derbyshire, Chesterfield	40.9	41	59.1	59	-0.1
Derbyshire, Mid	35.1	39.5	63.9	60.5	-3.4
Derbyshire, North-Eastern	42.4	43.7	57.6	56.3	-1.3
Lancashire, Clitheroe	32.7	32.3	67.3	67.7	0.4
Lancashire, Gorton	48.4	47.8	51.6	52.2	0.6
Lancashire, Ince	39.4	42.8	60.6	57.2	-3.4
Lancashire, Westhoughton	43.2	46.8	56.8	57.2	0.4
Staffordshire, North-Western	40.2	37.8	59.8	62.2	2.4
Warwickshire, Nuneaton	49.2	47.8	50.8	52.2	1.4
Yorkshire, Hallamshire	37.8	40.1	62.2	59.9	-2.3
Glamorganshire, Rhondda	21.8	29	78.2	71	-7.2
Glamorganshire, Southern	39	41.6	61	58.4	-2.6
Glasgow, Blackfriars and Hutchesonstown	38.3	40.9	61.7	59.1	-2.6
平均	41.0	42.9	59.0	57.2	-1.8

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は各党の得票率、右端のコラムは労働党の得票率の増減を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

(3) 三つ巴戦

表9 1910年1月総選挙と12月総選挙とともに統一党・自由党・労働党の三つ巴戦であった1人区における各党の得票率(%)

選挙区	統一党		自由党		労働党		自由党 の増減	労働党 の増減
	1910.01	1910.12	1910.01	1910.12	1910.01	1910.12		
Huddersfield	30.2	28.6	36	39.8	33.8	31.6	3.8	-2.2
Durham, Bishop Auckland	30	29.2	42.1	37.6	30	33.2	-4.5	3.2
Durham, Jarrow	32.5	33.3	34	34	33.5	32.7	0	-0.8
Lanarkshire, Mid	35.9	36.6	38.4	38.7	25.7	24.7	0.3	-1
平均	32.2	32.0	37.6	37.5	30.8	30.6	-0.1	-0.2

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は各党の得票率、右の2列は自由党、労働党の得票率の増減を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

1月総選挙でも12月総選挙でも統一党・自由党・労働党の三つ巴戦であった4つの選挙区の得票率の変化を掲出したのが表9である。このカテゴリーについては、明確な傾向を見て取るのは難しい。ハダスフィールド(Huddersfield)では労働党が票を減らして自由党が票を上積みし、ダラム、ビショップ・アクランド(Durham, Bishop Auckland)では自由党が票を減らし労働党が得票を

上積みした。だがダラム、ジャロー (Durham, Jarrow) やミッド・ラナークシャー (Lanarkshire, Mid) ではほとんど得票率に変化がみられなかった。⁽⁸⁾

4 対決の構図が変化した 1 人区

次に政党の対決の構図が変わった 1 人区の戦況を検討してみよう。まず 1 月選挙では、統一党・自由党・労働党の三つ巴戦だったが、12 月総選挙では労働党が立候補を見送り統一党と自由党の対決に変わった 1 人区は、表 10 に示す 11 の選挙区であった。

表 10 1910 年 1 月選挙統一党・自由党・労働党の三つ巴戦だったが、12 月選挙では統一党・自由党の一騎打ちとなった 1 人区の各党の得票率 (%)

選挙区	統一党		自由党		労働党	自由党の増減
	1910.01	1910.12	1910.01	1910.12		
Bristol, East	30.8	37.1	52	62.9	30.8	10.9
Middlesbrough	35.3	38.9	50.5	61.1	14.2	10.6
Cheshire, Crewe	37.2	43.7	53.3	56.3	9.5	3
Cheshire, Hyde	39.3	48.6	39.5	51.4	21.2	11.9
Cumberland, Cockerrough	45.2	47.3	35.9	52.7	18.9	16.8
Gloucestershire, Tewsbury	53.2	52	44.7	48	2.1	3.3
Lancashire, Eccles	38.7	47.6	41	52.4	20.3	11.4
Lancashire, Leigh	35.1	44.8	40.2	55.2	24.7	15
Yorkshire, Spen Valley	31.9	47.4	44.8	52.6	23.3	7.8
Lanarkshire, Govan	33.7	43.1	43	56.9	23.3	13.9
Lanarkshire, North-Eastern	38.4	42	49.8	58	11.8	8.2
平均	38.1	44.8	45.0	55.2	18.2	10.3

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は各党の得票率、右端のコラムは労働党の得票率の増減を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

表 10 から明らかなように、労働党が立候補を見送ったため、自由党が新たに議席をもぎ取ることができたのは、カンバーランドのコッカマウス (Cumberland, Cockermouth) 選挙区だけであった。この選挙区では、1月選挙での労働党の得票率の 9 割程度が、12 月総選挙では自由党候補の得票率に上乗せされ、自由党が議席を統一党から奪い取った。この選挙区では、共通の敵に対して自由党と労働党の支持者が堅固な結束をみせたと考えねばならない。⁽⁹⁾

しかし他の選挙区をみると、労働党が候補をたてなかつた際、必ずしも自由党が労働党の票をそっくり吸収しているわけではないことが分かる。平均的には、労働党の得票率の半分強しか自由党の得票率に積み増しされてはいない。つぶさに戦況をみると、コッカマウス選挙区と、グロスター・シャーのチューズベリー (Gloucestershire, Tewsbury) 以外の選挙区では、いずれも自由党がすでに 1 月選挙で議席を得ていた。こうした自由党の現職の選挙区では、自由党と労働党の支持者が結束して共通の敵から議席を奪うという目標が存在しなかつた。つまり共通の敵から議席を奪うという目標がない場合には、労働党の支持者は、労働党の候補がいない場合にも、必ずしも自由党に票を投じたわけではなかつたことが分かる。この事実は、労働党の支持者の自由党候補への協力関係が、戦況に応じたタクティカル・ウォーティングの性格をもつていたことを伺わせる。

さらに三つ巴戦から、統一党と労働党の対決に変わつた選挙区は、表 11 に掲出したホワイトヘイブン (Whitehaven) 選挙区であった。⁽¹⁰⁾ ホワイトヘイブンの場合、1910 年 1 月総選挙の三つ巴戦の結果は、自由党と労働党の票がほとんど同じ水準にあり、自由党の得票率は、労働党よりわずかに 0.9% 大きかつたに過ぎない。この数字から判断すれば自由党と労働党が競い合えば、統一党から議席を奪うことができないのは誰の目にも明確であった。結果として、この選挙区では、12 月総選挙で自由党が候補を立てなかつたため、労働党は 24.9% も得票率を伸ばし、統一党から議席を奪いとることに成功した。労働党の得票率の上昇は、1 月総選挙の自由党の得票率の 8

割以上にあたる。これは、共通の敵がある場合、自由党の支持者が労働党の候補に進んで投票したこと、両党の支持者が目覚ましい結果を示した顕著な例とみてよいであろう。

表 11 1910 年 1 月総選挙では統一党・自由党・労働党の三つ巴戦であったが、12 月総選挙では統一党対労働党の一騎打ちとなった 1 人区の各党の得票率 (%)

選挙区	統一党		自由党	労働党		労働党の増減
	1910.01	1910.12		1910.01	1910.12	
Whitehaven	41.5	46.3	29.7	28.8	53.7	24.9

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は各党の得票率、右端のコラムは労働党の得票率の増減を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

一方統一党・労働党の対決が、統一党・自由党の対決となったのは表 12 の 4 選挙区であった。この場合、労働党から自由党に候補が変わることによって統一党から議席を奪ったのは、得票率を 6% 伸ばしたヨークシャーのウェークフィールド (Wakefield) 選挙区だけであった。とはいっても、リバプールのウエスト・トクテス (Liverpool, West Toxteth) 選挙区では、自由党の候補は、前回の労働党の得票率の 8 割強程度を維持、そのほかの二つの選挙区—バーミンガム東 (Birmingham, East) とウォルバーハンプトン西 (Wolverhampton, West) でも、自由党の候補は絶対得票数では得票を減らしているものの、労働党が前回得た得票率を維持し伸ばすことに成功した。これらの選挙区では、1 月総選挙に労働党に投票した有権者は、12 月には積極的に自由党の候補者に票を投じたと考えることができる。⁽¹¹⁾

ただし掲出外であるが、実はバーミンガム東の場合には、投票率が、12 月総選挙では 81.5 から 64.5 に大きく下落した。これは、1 月総選挙で労働党の候補に投票したかなりの有権者が 12 月には棄権に回った可能性を示唆している。

表 12 1910 年 1 月総選挙では統一党・労働党の一騎打ちであったが、12 月総選挙では統一党対自由党の一騎打ちとなった 1 人区の各党の得票率 (%)

選挙区	統一党		労働党	自由党	自由党と 労働党の 得票率の 差
	1910.01	1910.12	1910.01	1910.12	
Birmingham, East	68.1	67.5	31.9	32.5	+0.6
Liverpool, West Toxteth	57.5	61.7	42.5	38.3	-4.2
Wakefield	54.5	48.3	45.5	51.7	+6.2
Wolverhampton, West	52.4	51.3	47.6	48.7	+1.1
平均	58.1	57.2	41.9	42.8	+0.9

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は各党の得票率、右端のコラムは 12 月総選挙における自由党の得票率と、1 月総選挙における労働党の得票率の差を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

一方自由党と労働党が協力できなかった場合、両党にとって破滅的な結果がもたらされた。統一党と自由党の対決に労働党が参戦した 1 人区は表 13 に掲げた 2 つの選挙区であり、統一党と労働党の対決に自由党が参戦した 1 人区は表 14 に示した選挙区であった。12 月総選挙で労働党が参戦したリーズ南 (Leeds, South) とグラモーガンシャー東 (Glamorganshire Eastern) 選挙区の場合には、12 月総選挙で自由党は、1 月総選挙の得票率から労働

党が獲得した分をそっくり奪われている。こうした選挙区ではもともと統一党の党勢が強くないため、自由党は議席を維持することができたものの、自由党はいずれの選挙区でも12月総選挙では過半数を割り込んだ。逆に12月総選挙で自由党が参戦したチャタム（Chatham）選挙区の場合、労働党は参戦した自由党が獲得した得票をほぼそっくり失い、一桁台の惨めな得票に転落してしまっている。チャタムの場合、自由党の側も、前回労働党が獲得した得票率に達することはできず、議席にはほど遠い結果に終わった。こうした事例は、自由党と労働党の協力が破綻した場合、自由党が大幅に得票率を下げ、労働党は惨めな泡沫候補に転落する危険すらあったことを如実に物語っている。⁽¹²⁾

他方自由党にとってかわる挑戦者としての労働党の可能性を鮮やかに示したのは、三つ巴戦から自由党と労働党の対決に変わったファイフ西選挙区（Fife, Western）であった。⁽¹³⁾（表14）この選挙区の場合、12月総選挙では統一党が立候補を見送った。その結果、自由党はむしろ得票率を下げ、労働党は前回統一党がとった得票率をそっくり積み増して自由党から議席を奪った。ただし掲出外であるが、1月総選挙の投票率は73.16%であったが、12月総選挙では61.4%に低下し、これは統一党の支持者の一定部分が棄権に回った可能性を示唆している。

ファイフ西選挙区で、具体的にどれだけの統一党の票が労働党に回ったかを推定するために、各党の絶対的な得票数を検討してみよう。表14の括弧内の数字に示したように、自由党の絶対的な得票数は2回の選挙でほとんど変わっていない。従って12月総選挙で労働党が新たに積み増した1392票のほとんどは、前回は統一党に投じた票であった考えねばならない。もしこれが正しいとすれば、1月総選挙で統一党に投じられた票の69%程度の票が、12月総選挙では労働党へ投じられたことになる。

このファイフ西選挙区の例は、自由党と労働党の対決となった場合、統一党の支持者が大挙して労働党に票を投じ、自由党が労働党に議席を奪われるという、自由党にとって悪夢のような事態が一部で現実のものになっていた

ことを示している。もちろん、この選挙区の特殊な戦況を一般化することはできない。だが少なくとも、労働党がついに自由党の地位を脅かす挑戦者となって立ち現れる選挙区が出現したことは重要な意味をもっている。

表 13-1 1910 年 1 月総選挙では自由党と統一党の一騎打ちだったが、12 月総選挙では労働党が参戦した 1 人区の各党の得票率 (%)

選挙区	統一党		自由党		労働党	自由党の増減
	1910.01	1910.12	1910.01	1910.12	1910.12	
Leeds, South	32.7	30.3	67.3	48.2	21.5	-19.1
Glamorganshire Eastern	28.0	28.9	72.0	47.0	24.1	-25.0

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は各党の得票率、右端の列は自由党の得票率の増減を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

表 13-2 1910 年 1 月総選挙では自由党と労働党の一騎打ちだったが、12 月総選挙では自由党が参戦した 1 人区の各党の得票率 (%)

選挙区	統一党		自由党	労働党		労働党の増減
	1910.01	1910.12	1910.12	1910.01	1910.12	
Chatham	54.7	56.4	34.7	45.3	8.9	-36.4

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は各党の得票率、右端の列は労働党の得票率の増減を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

表14 1910年1月総選挙では三つ巴戦だったが、12月総選挙では自由党と労働党の一騎打ちとなった1人区の各党の得票率(%)

選挙区	統一党	自由党		労働党		自由党の増減	労働党の増減
	1910.01	1910.01	1910.12	1910.01	1910.12		
Fife, Western	15.5 (1994)	47.8 (6159)	47.0 (6128)	36.7 (4736)	53.0 (6128)	-0.8 (-31)	+16.3 (1392)

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は各党の得票率、括弧内の数字は得票数を示す。右端のコラムは労働党の得票率の増減を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

5 2人区の戦況

第3次選挙法改正によって、ほとんどの選挙区は1人区の小選挙区に再編されたが、都市部に25の2人区が残された。表15は、1910年の2つの総選挙における2人区の立候補者数と当選者数を示したものである。12月総選挙では候補者数は幾分減少したが、当選者の内訳は、統一党が1議席を減らし、労働党が1議席を勝ち取った以外には、大きな変化はみられない。

表15 1910年1月総選挙と12月総選挙における2人区の候補者数と当選者数

	統一党	自由党	労働党	その他	計
1910.01	47(18)	33(21)	13(10)	6(1)	99 (50)
1910.12	44(19)	31(20)	12(11)	4(0)	91(50)

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は各党の立候補者数。括弧内は当選者を示す。

表 16 1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙における 2 人区の政党の対決の構図

1910 年 1 月総選挙						
1 9 1 年	統一党 ・自由党	統一党 ・ 自由党+労働 党	三つ巴	その他	無投票	
0 年	統一党・自由党	7	1	1		
1 2 月	統一党・自由党+労働 党		8	3		
総 選 挙	三つ巴					
	その他			1		
	無投票	2				2

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は該当する選挙区の数。
3. 統一党・自由党には、両党がそれぞれ 2 候補を立てた場合と、候補を 1 人しか立てなかったケースが含まれている。
4. 統一党+自由党・労働党は、自由党と労働党がそれぞれ候補を 1 人に絞って統一党と対抗した選挙区を意味する。ただし統一党の候補が 1 人の場合と 2 人の場合を含む。
5. 三つ巴には、自由党が候補を 1 人に絞らず、統一党の候補、労働党の候補と議席を争ったケースを意味する。
6. 無投票には、同じ政党の候補が 2 議席を独占した場合と、統一党と自由党が一人ずつたてて、無投票となったケースを含む。

しかし表 16 に掲出した政党の対決の構図を子細に検討してみると、興味深い変化がみられる。まず 1 月に統一党・自由党の対決区だった選挙区

のうち、2選挙区（City of London, York）は12月には無投票に変わった。一方1月選挙で三つ巴戦だった1選挙区（Potsmouth）は、12月には統一党と自由党の正面対決に変わった。また1月には諸派がたった選挙区のうち1つの選挙区（Northampton）は、12月には自由党と統一党の対決に変わり、3つの選挙区（Preston, Sunderland, Merthyr Tydfil）は、自由党と労働党が組んで統一党と対決する形となった。第3次選挙法改正後の制度では、2人区については、有権者が2票行使する複数投票制がとられ、その票の行方について記録がほとんどの選挙区について残っている。このため2人区の戦況は、各政党の支持基盤の在り方を物語る貴重な資料を提供する。

まず両方の選挙で、いずれも統一党と自由党の対決となった7つの選挙区をみてみよう。表17に掲出したように、この7つの選挙区では、統一党と自由党の得票率は、いずれの選挙でも、数パーセント差で拮抗していた。しかし1月総選挙ではわずかに自由党がなお50%を制していた。これに対して12月総選挙では自由党は平均-1.21%得票率を落とし、逆に統一党が50%を制している。1人区について先に指摘したように、選挙においては1票差でも勝利である以上、わずかな差であってもどちらが50%を制するかは重大な意味をもっている。2人区における自由党と統一党の対決では、自由党は1人区よりさらに大きく得票率を減らして50%の分水嶺を割り込んでいた。2人区では議席の上でも、12月総選挙で自由党は統一党との正面対決で、1議席を落とした。1人区の一騎打ち選挙区以上に2人区の直接対決でも、自由党は、統一党に逆転され競り負けつつあった。

この7つの選挙区のうち、1910年1月総選挙のデータがないプリマス（Plymouth）12月総選挙のデータがないサザンpton（Southampton）をのぞく、5つの選挙区で自由党に投じられた2票の内訳は表18のとおりである。いずれの選挙区でも、自由党と統一党との組み票の割合は著しく低く、自由党候補2人に組み票で投じられた票が圧倒的であることが分かる。このことは統一党と自由党の支持基盤が明確に分かれ、草の根で激しく対立していたことを物語っている。⁽¹⁴⁾

表17 1910年1月と12月の総選挙で自由党と統一党の対決であった2人区における政黨の得票率(%)

	統一党		自由党		自由党の得票率の増減
	1210.01	1210.12	1210.01	1210.12	
Bath	51.05	51.70	48.95	48.30	-0.65
Brighton	60.76	61.60	39.24	38.40	-0.84
Devonport	51.55	51.70	48.45	48.30	-0.15
Ipswich	48.41	48.10	51.59	51.90	+0.31
Oldham	40.60	44.00	59.40	56.00	-3.4
Plymouth	48.65	52.30	51.35	47.70	-3.65
Southampton	47.02	47.10	52.98	52.90	-0.08
平均	49.72	50.93	50.28	49.07	-1.21

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は各党の得票率、右端のコラムは1月総選挙と12月総選挙における自由党の得票率の増減を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

憲政危機と勝利の陥渓

表18 1910年1月と12月の総選挙で自由党と統一党の対決であった2人区における自由党候補に投じられた2票の分析

選挙区	1910年1月			1910年12月		
	単独票	自由党候補との組票	統一党候補との組票	単独票	自由党候補との組票	統一党候補との組票
Bath	20 (0.27)	7380 (98.03)	128 (1.70)	25 (0.35)	7126 (98.75)	65 (0.90)
Brighton	43 (0.29)	14892 (99.43)	43 (0.29)	63 (0.47)	13314 (99.20)	45 (0.34)
Devonport	108 (1.05)	10006 (97.28)	172 (1.67)	64 (0.67)	9424 (97.93)	135 (1.40)
Ipswich	72 (0.60)	11878 (98.34)	128 (1.06)	70 (0.60)	11514 (98.22)	139 (1.19)
Oldham	330 (0.87)	37078 (97.34)	684 (1.80)	270 (0.79)	32794 (96.31)	985 (2.89)
平均値 (%)	0.61	98.08	1.30	0.57	98.08	1.34

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は自由党候補に投じられた単独票と、自由党、統一党候補との組み票の数を示す。括弧内は、それぞれの選挙での構成比を示す。

次に両方の選挙でいずれも、自由党と労働党が組んで、統一党が対決した8つの選挙区を表19によってみてみよう。このカテゴリーでは、実は自由党と労働党は、平均2%近く得票率を伸ばした。ただしこれは、ダービー(Derby)、レスター(Leicester)、ノリッジ(Norwich)選挙区で、統一党が12月総選挙で候補を一人に絞ったことが直接の原因と考えられる。候補者の数が変わらなかったブラックバーン(Blackburn)、ボルトン(Bolton)、ニューカッスル・アポン・タイン(Newcastle upon Tyne)、ストックポート(Stockport)だけを集計すると、自由党の得票率の上昇は平均0.1%、労働党は平均0.3%の上昇にとどまる。

表19 1910年1月と12月選挙で統一党と自由党・労働党が対決した選挙区の各党の得票率(%)

	統一党		自由党		労働党		統一党の増減	自由党の増減	労働党の増減
	1910. 01	1910. 12	1910. 01	1910. 12	1910. 01	1910. 12			
Blackburn	43.4 (2)	47.3 (2)	28.5	26.3	28.1	26.4	3.9	-2.2	-1.7
Bolton	38.0 (2)	29.8 (2)	31.5	35.5	30.5	34.7	-8.2	4.0	4.2
Newcastle upon Tyne	43.1 (2)	43.9 (2)	29.9	28.1	28.1	28.0	0.8	-0.8	-0.1
Stockport	44.1 (2)	46.0 (2)	27.9	27.1	28.0	26.9	1.9	-0.8	-1.1
Halifax	20.4	34.3 (2)	40.7	33.4	38.9	32.3	13.9	-7.3	-6.6
Derby	43.8 (2)	30.4	28.3	35.5	27.9	34.1	-13.4	7.2	6.2
Leicester	36.6 (2)	22.3	32.0	39.2	31.4	38.5	-14.3	7.2	7.1
Norwich	42.3 (2)	27.8	29.0	36.4	28.7	35.8	-14.5	7.4	7.1
	39.0	35.2	30.9	32.7	30.2	32.1	-3.7	1.8	1.9

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は各党の得票率、右端のコラムは1月総選挙と12月総選挙における自由党の得票率の増減を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

それでも自由党と統一党が対決した選挙区が、得票率を落としたのに比べれば、このカテゴリーでの戦績は良いと言えるであろう。⁽¹⁵⁾

憲政危機と勝利の陥糸

この8つの選挙区において自由党に投じられた2票の内訳は表20のとおりである。自由党と労働党の組票の比率は、1910年1月総選挙では94.04%、1910年12月総選挙でも92.67%に達していた。こうした選挙区においては、自由党と労働党の支持者の結束は極めて固く、両党の支持基盤はほぼ重なっていたと言つてよい。

表20 1910年1月と12月選挙で統一党と自由党・労働党が対決した選挙区の自由党候補の2票の分析

選挙区	1910年1月			1910年12月		
	単独	労働党と の組み票	統一党と の組み票	単独	労働党と の組み票	統一党と の組み票
Blackburn	409 (3.47)	11239 (95.45)	127 (1.08)	327 (3.04)	10025 (93.22)	402 (3.74)
Bolton	542 (4.42)	11244 (91.60)	489 (3.98)	525 (5.07)	9282 (89.61)	551 (5.32)
Newcastle upon Tyne	806 (4.29)	17716 (94.30)	264 (1.41)	682 (4.11)	15597 (93.96)	320 (1.93)
Stockport	264 (3.97)	6239 (93.89)	142 (2.14)	368 (5.97)	5575 (90.37)	226 (3.66)
Halifax	595 (6.26)	8673 (91.26)	236 (2.48)	349 (3.98)	8224 (93.69)	205 (2.34)
Derby	345 (3.34)	9919 (95.90)	79 (0.76)	483 (5.08)	8679 (91.21)	353 (3.71)
Leicester	420 (2.87)	13947 (95.25)	276 (1.88)	728 (5.50)	12316 (93.04)	194 (1.47)
Norwich	325 (2.88)	10679 (94.70)	273 (2.42)	850 (8.21)	9270 (89.57)	229 (2.21)
平均比率 (%)	3.94	94.04	2.02	5.12	91.83	3.05

注記

1. F.W.S.Craig ed., *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より作成。
2. 数字は自由党候補に投じられた単独票と、労働党、統一党候補との組み票の数を示す。括弧内は、それぞれの構成比を示す。

1月には保守系の独立した候補者が立ち、12月には統一党2人と自由党、労働党各1の対決となったサンダーランド(Sunderland)では、1910年12月に自由党と労働党が議席を保守陣営から奪い返した。(表21)この選挙区でも、自由党票の労働党票との組み票は、1910年1月で92.9%、1910年12月で91.9%に達しており、共通の敵に対する両党の支持者の堅固な結束を物語っている。

表21 サンダーランド(Sunderland)選挙区の2票の分析

1910年1月

	候補者	単独 票	組み票				計
			自由党	労働党	統一党	保守系	
自由党	Stuart	490		10707	131	201	11529
労働党	Summerbell	252	10707		35	64	11058
統一党	Knott	128	131	35		11976	12270
保守系	Storey	93	201	64	11976		12334

1910年12月

	候補者	単独 票	組み票				計
			自由党	労働党	統一党 1	統一党 2	
自由党	Greenwood	717		11022	192	66	11997
労働党	Goldstone	188	11022		57	24	11291
統一党 1	Joynson-hicks	113	192	57		9938	10300
統一党 2	Samuel	104	66	24	9938		10132

注記

1. F.W.S.Craig, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より集計。
2. 網掛けは当選者を示す。
3. 自由党1, 自由党2は、自由党からの1人目の候補者、2人目の候補者を示す

とはいって、自由党と労働党の支持者の結束が必ずしも明確ではない場合もあった。例えば1月には三つ巴戦だったが、12月には統一党と自由党の対決になったポートマス（Portsmouth）選挙区（表22）をみてみよう。⁽¹⁶⁾この選挙区では、1906年には、自由党は、労働党、統一党の候補に独立系の候補が加わった選挙で、労働党が票を割ったにもかかわらず、自由党が議席を制していた。ところが1910年1月には三つ巴戦で、自由党が議席を統一党に奪われた。そして1910年12月総選挙では、労働党が候補を取り下げ、結束して議席の奪還をめざしたものの、それでも自由党は議席にわずかに届かなかった。

細かくみると、この選挙区で1906年に労働党は17.6%もの得票を得ていたものの、自由党との組票の割合は比較的低く（24.7%）、単独票の比率（47.8%）や独立候補との組み票の比率（15.1%）が比較的高かった。1910年1月の労働党得票の内訳は、自由党との組み票の比率がかなり高くなっている（49.6%）が、労働党は6.1%にまで得票率を大きく減らしていることが注目される。1906年には自由党の得票も大幅に下がっており、自由党に大きく票が流れた証拠はない。このことから、1906年に労働党に投じられた票は、その後統一党や統一党系の独立候補に流れたと推定される。事実自由党の2候補の得票率は、労働党候補がたった1906年には22.6%と22.0%、同じく労働党候補がたった1910年1月には21.3%と17.1%だった。だが労働党候補がいなくなつた1910年12月にも自由党の得票率は23.4%と23.2%に過ぎず、1906年の水準とほとんど変わらない。軍港ポートマスの場合、ドイツとの建艦競争の中、軍備競争に消極的な自由党への支持が比較的弱いことが考えられ、さらに、軍需生産にかかわる労働者が多いため、他の選挙区とは労働者と自由党の関係も異なつてゐたことが推測される。

表 22 ポーツマス (Portsmouth) 選挙区の 2 票の分析

1906年

	候補者	単独 票	組み票						計
			自由党 1	自由党 2	労働党	統一党 1	統一党 2	独立	
自由党 1	Bramdon	80		9141	1167	34	14	64	10500
自由党 2	Baker	144	9141		843	22	15	71	10236
労働党	Sanders	3883	1167	843		604	449	1226	8127
統一党 1	Hills	97	34	22	604		7050	163	7970
統一党 2	Whitelaw	76	14	15	449	7050		148	7752
独立	Jane	187	64	71	1226	163	148		1859

1910年1月

	候補者	単独票	組み票					計
			自由党 1	自由党 2	労働党	統一党 1	統一党 2	
自由党 1	Bramdon	147		9798	1666	687	99	12397
自由党 2	Lambert	11	9798		83	60	13	9965
労働党	Sanders	1481	1666	83		284	15	3529
統一党 1	Beresford	291	687	60	284		15455	16777
統一党 2	Falle	10	99	13	15	15455		15992

1910年12月

	候補者	単独 票	組み票				計
			自由党 1	自由党 2	統一党 1	統一党 2	
自由党 1	Hammerde	93		12930	114	9	13146
自由党 2	Harben	37	12930		24	22	13013
統一党 1	Beresford	182	114	24		14865	15125
統一党 2	Falle	20	9	22	14865		14856

注記

1. F.W.S.Craig, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より集計。
2. 網掛けは当選者を示す。
3. 自由党 1, 自由党 2 は、自由党からの 1 人目の候補者、2 人目の候補者を示す

一方炭鉱の町マーサ・ティディフィル選挙区では、自由党の退潮がくっきりと示されている。この選挙区は労働党の創設者ケア・ハーディーの選挙区で、1900年には、自由党候補2人と労働党のハーディーの対決でハーディーが自由党の一人の候補を蹴落として議席を獲得。1906年にも、自由党候補2人とハーディーが議席を争い、自由党の一人の候補を蹴落としてハーディーが議席を維持していた。⁽¹⁷⁾

1910年1月には、自由党は候補を一人に絞ったが、自由党系の独立候補がもう一人立候補、さらに統一党からも候補がでて、ハーディーとあわせて4人で議席を争う選挙戦となった。この時の2票の行方は、ハーディー陣営からの要請で公表されておらず、地元紙が報じた単独票の数字だけが残されている。しかしこの単独票の数字と最終得票数からみて、労働党の組み票のほとんどが、自由党候補に投じられており、自由党の組み票もほとんどすべてが労働党の候補に投じられていたと推測される。

しかし1895年以来この選挙区に候補を立ててこなかった統一党の候補が、1月総選挙で4756票を獲得し、自由党系の独立候補を1000票以上引き離したことは大きな意味をもっていた。1906年の段階では、自由党の合計票はハーディーの2倍近くあり、うまく票割をしさえすれば、労働党の議席を奪う可能性は残っていた。しかし1910年1月の選挙では自由党候補の合計得票数は、なお19000票を超えていたが、統一党が候補を立てることを前提とすれば、自由党が2人候補を出しても、票を大きく積み増している労働党ハーディーから議席を取り戻す可能性は極めて低くなっていた。

その結果、1910年12月には、結局自由党は候補を一人に絞り込み、ハーディーと、統一党の候補と三者で議席を争う形に変わった。マーサ・ティディフィルでは、議席を見る限り、自由党と労働党は1906年から同じように議席を分け合ってきた。だがその戦況をつぶさに観察すると、自由党は労働党から議席を奪うために複数候補をたてる余裕を失ってしまっていたことが分かる。

表 23 マーサ・ティディフィル (Merthyr Tydfil) 選挙区の 2 票の分析

1906年

	候補者	単独票	組み票			計
			自由党 1	自由党 2	労働党	
自由党 1	Thomas	651		5878	7409	13971
自由党 2	Radcliffe	1438	5878		441	7776
労働党	Hardie	2304	7409	441		10187

1910年1月

	候補者	単独票	組み票			計
			自由党 1	自由党 2	労働党	
自由党	Jones	375				15448
自由党系	Morgan	75				3639
労働党	Hardie	1872				13841
統一党	Fox-Davies	3186				4756

1910年12月

	候補者	単 独 票	組み票			計
			自由党 1	労働党	統一党	
自由党	Jones	2188		8586	1484	12258
労働党	Hardie	2634	8586		287	11507
統一党	Watts	3506	1484	287		5277

注記

1. F.W.S.Craig, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Service, Dartmouth), 2nd. edition, 1989 より集計。
2. 網掛けは当選者を示す。
3. 自由党 1, 自由党 2 は、自由党からの 1 人目の候補者、2 人目の候補者を示す

6 結びに代えて

12 月総選挙の結果に不安を隠しきれなかったロイド・ジョージは、選挙結果を知って「イングランドの国民はオースティン・チェンバレン (Austen

Chamberlain) の娘よりお前が好きみたいだ」と娘に伝えてくれるように妻に書き送った⁽¹⁸⁾。激しい政治決戦をかろうじて制した喜びが文面に滲んでいる。

確かに自由党は、1910年1月総選挙で得た議席を12月総選挙で維持するのに成功した。この戦果を基礎に、自由党は貴族院の拒否権を奪う画期的な憲法上の改革を実現する。自由党は、労働党とアイルランド国民党と連携して改革を成し遂げ、一方労働党は、まだ自由党と争って三つ巴の選挙で議席を制する力はなかった。その意味では、1910年の2つの総選挙は、1906年以来再生を遂げた自由党の歴史的な勝利を飾る選挙であったと言つて間違ひではない。

しかしロイド・ジョージが不安に駆られたように、12月総選挙での自由党の勝利は決して盤石のものではなかった。統一党との正面対決では、1人区でも2人区でも自由党は50%を割り込み、激しいつばぜりあいに敗れつつあった。自由党は一騎打ち選挙区の得票率では、1906年の支持を回復することはもちろん、1月総選挙での支持を維持することもできなかった。労働党も、統一党との一騎打ち選挙区で得票率を落としていたが、労働党はなお統一党に大きなリードを保っていた。

労働党の支持者は共通の敵に対しては自由党候補を支持したが、選挙区によっては、労働党が自由党にとってかわる挑戦者としての姿を徐々に現し始めていた。1910年のいづれの選挙でも、保守陣営に対する自由党と労働党の支持者の結束は、なお極めて堅固であった。しかし自由党がすでに議席を得ていたところでは、労働党の支持者は必ずしも自由党の候補に投票しなかった。さらにファイファ西選挙区のように、統一党が候補をたてなかつた場合、労働党が統一党の支持票を引き寄せて自由党から議席を奪う例すら現れていた。またマーサ・ティディフィルのように、自由党が二人目の候補を立てても、労働党を議席から蹴落とすことが事実上困難になつてゐた選挙区も現れていた。

労働党書記ラムゼイ・マクドナルド (Ramsay MacDonald) は、1913年

に出版された『社会不安』*Social Unrest*と題した著作の中で、1910年から始まった労働者のストライキの波は、自由党政権下での「社会改革の限界」を意味していると厳しく宣告した⁽¹⁹⁾。マクドナルドの予言通り、貴族院の拒否権を奪い、国民健康保険を実現したにもかかわらず、1910年の二度の総選挙は、自由党にとって最後の勝利となり、自由党の党勢が再び盛り返すことはなかった。1910年の2つの選挙結果は、自由党の勝利の足元に広がる陥穽を示唆していたのであった。

注記

- (1) 本稿では、保守党（Conservative）と自由統一党（Liberal Unionists）を原則として統一党（Unionists）として一括して扱っている。厳密にはこの時点ではなお両者は別の組織であったが、選挙については事実上一体として自由党、労働党と争っていた。
- (2) 本稿は、ヴィクトリア時代後期から第一次大戦期にかけてのイギリスの政治的な変動を、選挙政治の観点から分析する筆者の一連の研究の一環をなす。1910年総選挙の研究としては、なかんずく Neal Blewitt, *The Peers, The Parties, and the People: The General Elections of 1910* (University of Toronto Press, 1972) を挙げねばならない。ブレヴィットの研究は、極めて包括的な研究であり、今なお 1910 年総選挙の全貌を捉える上で欠かすことができない。だがブレヴィットは、自由党の勝利を高く評価して、この時期の労働党はあくまでも自由党によって「封じ込められていた」とみている。筆者は、一連の研究を通じて、1906年以後、労働党と自由党の間の対立と矛盾が深まってきていたことを指摘してきた。本稿は、1910年の2度の総選挙の結果を政党の対決の構図を組み込んで分析することで、ブレヴィットの見解を批判的に再検討し、これまでの分析を補う試みである。関連の文献と筆者のこれまでの分析については、以下の論稿を参照されたい。「近代イギリス選挙史研究序説—第三次選挙法改正後のイギリスの政治変動」（『イギリス研究の動向と課題』、大阪外国

語大学、1997年所収)、「アイルランド自治問題とイギリス政治の転換-1886年総選挙における自由党の分裂」(『グローバルヒストリーの構築と歴史記述の射程』、大阪外国语大学、1998年所収)、「19世紀末における自由党の衰退」(『国際社会への多元的アプローチ』、大阪外国语大学、2001年所収)、「自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—」(『英米研究』、大阪外国语大学英米学会、2004年所収)、「1906年総選挙と自由党の再生—20世紀初頭の補欠選挙と1906年総選挙における対決の構図—」(『英米研究』第30号、大阪外国语大学英米学会、2006年所収)、「1906年総選挙における自由党の再生と労働党一二人区の得票分析—」(『英米研究』第31号、大阪外国语大学英米学会、2007年所収)、「1906年総選挙における自由党の選挙基盤—一人区の得票分析」(『英米研究』第32号、大阪大学英米学会、2008年所収)、「自由党政権下の補欠選挙—綻びる自由党の基盤 1906年～1909年—」(『英米研究』第33号、大阪大学英米学会、2009年所収)、「20世紀初頭自由党政権下の社会政策と選挙政治—1906年～1910年1月—」(杉田編『日米の社会保障とその背景』大学教育出版、2010年所収)、「危機の時代の自由党—補欠選挙 1911年～1914年」(『英米研究』第35号、大阪大学英米学会、2011年所収)。

- (3) これまでの拙稿と同じく、アイルランドの政治情勢はブリテン本土とは様相を異にするため、以下特に断らない限り、本稿での分析の対象から除外している。
- (4) 12月総選挙で無投票になった選挙区には、1月総選挙では三つ巴戦ではなかったが、諸派の候補とともに自由党と労働党の候補が両方ともたっていた選挙区が含まれている。また12月総選挙の「その他」のカテゴリーに属する選挙区にも、いずれかの党が12月総選挙では候補をとりさげた選挙区があった。これらの選挙区は比較が難しいため、分析の対象から外している。
- (5) この時期の有権者名簿は、有権者の選挙権登録に基づいて毎年、双方の陣営からの異議申し立ての手続きを経た上で更新されていた。各政党は、有権者登録と異議申し立ての対策のために各選挙区で活動家を配置していた。有権者名簿はそうした政党の活動の結果であり、有権者の登録数は、必ずしも各選挙区の人口の増減を自動的に反映したものではなかった。それゆえ、有権者登録数を母数として計算される各選挙の投票率も、必ずしも有権者の選挙への関心の強弱を直接表現していると解釈することはできない。しかし1910年の1月と12月総選挙については、事情が異なる。この二つの総選挙は全く同一の有権者

名簿で選挙戦が闘われた。このためこの二つの総選挙に限って言えば、投票率は、同一の有権者名簿に載せられた有権者の選挙への関心を写していると想定することが許されるであろう。こうした観点から本論でも、若干の選挙区における投票率の影響について言及している。ただし投票率の変化が及ぼした影響を全体としてつぶさに分析するためには、稿を改めて論じなければならない。

- (6) Henry Pelling, *Social Geography of British Elections 1885-1910* (Macmillan, 1967)
- (7) ロンドンの東に位置するウールリッジには、大きな兵器工場があり、1903年以來労働党が議席を占めていた。1910年1月選挙での労働党の敗北の直接の要因は、自由党政権の下で行われた解雇だった、とペリングは指摘している。Ibid., p.40. 一方ランカストリアの重工業地帯に位置する炭鉱の町ヴィガンは、流入するアイルランド移民のカソリック信者への反発から労働者の間にも統一党への支持が強く、労働党が議席を確保できたのは、1910年1月選挙の後だけであった。Ibid., p.267. さらにセント・ヘレンズは、ガラス製造、炭鉱、機械工業、化学工業が盛んな工業地帯で、ここでも流入するアイルランド移民へ反発から労働者にも統一党への支持が強く存在し、1906年、1910年1月には自由党との協定に基づいて労働党と統一党との一騎打ちとなって労働党が議席を制したが、12月には議席を失った。Ibid.,p.266.
- (8) ヨークシャーの綿業の町ハダスフィールドでは1906年以來自由党と労働党、統一党の三つ巴戦を自由党が制してきたが、自由党と労働党との得票率の差は徐々に広がっていった。Ibid.,p.301. 炭鉱があるかたわら中産階級の居住区もあるダラム、ビショップアクリランドでは、1910年12月選挙で、労働者と中産階級双方に受けが良かった前職議員にかわって、自由党が地主の候補者を擁立したため、炭鉱夫が労働党の候補を立て、自由党票が大きく減少した。Ibid.,p.338. 他方炭鉱と造船の町ダラム、ジャローでは、1906年まで造船会社の創設者が自由党議員に選出されていた。創設者の死去に伴う1907年の補選では、有力候補不在の四つどもえ戦を労働党が制したが、1910年1月に創設者の息子が候補になると、再び創設者の係累に支持が集まった。Ibid.,p.334. ミッド・ランカシャーは、スコットランドの炭鉱町で、1885年以来一貫した自由党の地盤であり、1910年2度の選挙で労働党が候補を立てたが、いずれも二位につけることもできなかった。Ibid.,p.408

- (9) カンバーランドのコッカマウスは、鉄鉱石の採掘と精錬所の他、港があり、多数のアイルランド労働者がいた。1910年1月には三つ巴戦となって統一党が議席を制したが、1910年12月には、次項でとりあげるホワイトヘイブン選挙区で労働党に自由党が対抗馬をたてない引き換えに、労働党が候補をたてないことで労働党と自由党の間に合意が成立し、自由党候補と統一党候補の一騎打ちとなった。Ibid.,340-341.
- (10) カンブリアの港町ホワイトヘイブンは、1910年1月選挙では三つ巴戦を統一党が制していたが、12月選挙ではカンブリアの自由党と労働党がホワイトヘイブンでは自由党が候補をたてず、かわりにコッカマウスで労働党が候補を立てないことで合意し、12月選挙ではホワイトヘイブンを労働党が制した。Ibid., p.330-331.
- (11) ウエークフィールドは、ウエストライディングの産業地帯の中にある穀物市場の町で、比較的中産階級も多く、12月総選挙では労働党の候補にかわった自由党の候補が幅広く票を集めた。Ibid.,p.305-306. リバプールのウエスト・タクテスは、大きな港湾都市リバプールの南部、労働者の居住区で、多数のアイルランド移民のカソリック教徒がおり、その反発から国教会への結束が強く、1906年、1910年1月には、アイルランド系の労働党の候補が立候補したが議席には届かず、12月に自由党候補がこれにかわったがさらに票を落とした。Ibid.,p.250. バーミンガム東は、自由統一党の指導者ジョゼフ・チェンバレン (Joseph Chamberlain) の地元バーミンガムの中では、比較的自由党的力があつた選挙区であったが、それでも労働党も自由党もどちらも議席には全く届かなかつた。Ibid., p.183. ウォルバーハンプトン西は、小規模な金属産業が盛んなブラックカントリーにあって、農村的な色彩をもつていた選挙区であり、1906年に労働党が171票差で議席をとった以外は、一貫して保守党的議席であった。1910年12月に労働党にかわって自由党が立ち、絶対得票数はわずかに落としたものの、得票はいくらか伸ばし差をつめたがやはり届かなかつた。Ibid.,p.184-185.
- (12) リーズでは、リーズ中央、リーズ北、リーズ西選挙区で労働党が候補をたてない(1908年の補選でリーズ西選挙区で三つ巴戦になったのが唯一の例外であった)かわりに、リーズ東には自由党が候補をたてないという形で、1906年以来リーズ東で労働党が議席を確保してきていた。しかしリーズ南では、こうし

た合意がうまく作られず、1906年、1908年の補選、1910年12月選挙がいずれも三つ巴になった。労働党の得票率は1906年以来減少してきていたがそれでも1910年12月選挙でリーズ南で、20%強自由党の得票を押し下げた。Ibid.,p.292-293. グラモーガンシャー東は、自由党の強力な地盤のあるウェールズの選挙区であり、1910年1月には自由党候補は70%を超す得票率を得ていたが、1910年12月総選挙で初めて労働党候補が挑戦を試み、24.1%の得票を得たがなお自由党の議席を脅かすには遠かった。Ibid.p.359. チャタムはロンドンの東に位置する海軍のドックがある町で、労働者が多く、1906年には、労働党が統一党との一騎打ちで議席を制したが、1910年には逆に労働党は統一党に一騎打ちで敗れていた。12月総選挙では、自由党が参戦することで、労働党は36%も得票率を落として、惨めな最下位に転落してしまった。Ibid.,p.76.

- (13) ファイフ西選挙区はスコットランドのエジンバラ北東の炭鉱町であり、1906年までは自由党の固い地盤であったが、1910年1月には、炭鉱夫が自らの候補を労働党から擁立すると、一気に36.7%もの得票率をとって二位につけ、1910年12月には、ついに自由党と労働党との一騎打ちとなって、労働党が自由党を703票差で打ち負かした。Ibid.,p.394-395.
- (14) このカテゴリーで自由党が1910年12月に議席を落としたのは、デヴォンシャーのプリマスであった。この港町には多数の港湾労働者がおり、自由党と統一党陣営の一騎打ちが続いてきたが、1910年12月には自由党が数パーセント得票率を下げ、自由党の現職が2人とも落選した。ペリングは、貴族院の拒否権を封じ込めることがアイルランド自治へ発展することに対する警戒と、候補者の問題を自由党の敗因として指摘している。Ibid.,p.168.
- (15) イーストミッドランドに位置するダービー選挙区には、ミッドランド鉄道の作業場があり、そこで働く労働者が多数いた。自由党が総崩れとなった1900年選挙でも、この選挙区では逆に鉄道労組出身の自由党候補ベル（R.Bell）が当選を果たした。1910年1月選挙ではベルが引退した後、同じく鉄道労組出身の労働党候補と自由党候補が議席を分け合ったが、12月総選挙では統一党が候補を一人に絞って挑戦したが、自由党と労働党に割って入ることはできなかった。Ibid.,p.211-212.、小規模な靴製造の工場が多いレスターも、労働党の初期マクドナルドの地元であり、マクドナルドの主導で、1906年から自由党と労働

党が議席を分け合ってきた。1910年1月には統一党が二人候補者を立てたが、遠く及ばなかったため、12月には候補を一人に絞って自由党一労働党に挑んだが、やはり得票率で16.2%も差をつけられ完敗した。Ibid.,p.210-211. イースト・アングリアの中心地ノリッジでも、小規模な靴製造業が盛んであったが、同時に中間階級の居住地もあった。ここでも労働党と自由党が1906年以来議席を分けあい、1910年1月には候補を二人たてた統一党が12月には一人に候補を絞ったが、得票率で8%及ばなかった。Ibid.,p.90-92.

- (16) ポーツマスの戦況については、Ibid.,p.128-130.
- (17) マーサ・ティディフィルの戦況については Ibid.,p.351-352.
- (18) K.O.Morgan ed.,Lloyd George ; *Family Letters 1885-1936* (University of Wales press, Cardiff, 1973), p.154. オースティン・チェンバレンは統一党の影の蔵相。
- (19) Ramsay MacDonald, *Social Unrest*, (London, 1913) p.3, p.110.